

## 二度目の弁論ブームと雄弁青年たちの盛衰

—1900-1930年を中心として—

井上義和（京都大学大学院）

### 0. はじめに

かつて日本にも、雄弁がエリート予備軍の少年たちを惹きつけ、雄弁にとり憑かれた青年たちが時代を動かそうとし、そして実際に動かされもした時代があった。他方でそれは、雄弁が自ら生み出したメディアと運動に飲み込まれ、追い越され、ついに顧みられなくなる時代でもあった。本研究の対象は、明治30年代から昭和初期（ほぼ1900-30年）のあいだに盛衰サイクルを一巡させる、この雄弁青年たちの時代である。

「ついに顧みられなくなった」証拠に、この領域の主題化を試みた先行研究は極めて少ない（宮坂1968, 野地1980, 高橋1992）。また近年、教養主義など高等教育の文化的側面への歴史社会的アプローチが注目されつつあるが（筒井1995, 竹内1999）、主題的な制約もあり、実質的に雄弁青年抜きに歴史叙述が繰り返されている。

こうした研究動向の実情に鑑みて、埋没していた存在を発掘することはそれ自体歴史的に有意義なことと思われる。しかし同時に、それが埋没して顧みられなくなっていく歴史的・社会的条件を解明することも、社会的には有意義な問題であろう。この両方の観点が、とくに雄弁青年という対象を扱う際に重要であることは、本論で自ずと明らかになるはずだ。

あらためて本報告の目的を確認しておこう：

- ① 雄弁青年を歴史的存在として発掘し、かれらが日本近代史のなかで演じた役割の一端を明らかにすること。
- ② 雄弁青年たちが忘却の彼方に追いやられてしまう歴史的・社会的条件をも明らかにすること。

### 1. 「二度目」の弁論ブーム：1905-1915

明治10年代に自由民権運動と並行して起こった演説会の流行（第1次ブーム）については、興味深いエピソードを集成した宮武外骨の『明治演説史』（1929）をはじめ、これまで民衆運動史や国語教育史、言論・メディア史などの分野において比較的良好に紹介されてきた（中村1993, 山室1990, 後藤1972）。それに対して、明治30年代後半からの学校弁論部を中心とする二度目の流行（第2次ブーム）のほうは、殆ど研究対象にすらなっていない。ここがわれわれの出発地点である。

さて、『第三高等学校弁論部部史』（1935）を繙くことから本研究は開始された。したがって、先ずはこの資料に依拠しながら対象時期の見取図を作っておくのが簡便である。【表】に部史の概略を年表形式でまとめ、【図】に

関係者名簿を加工して年度別現役部員概数をグラフ化した（両者の符合性に注目）。これにより、三高弁論部の設立（1899）以降の質的変容／量的変動を辿ることができる。

三高の弁論熱には2つの「山」がある。前者（明44・大3）は関東のブームに刺戟されて起こったという「絢爛たる弁論部黄金時代」。一旦沈静化を経て、ブームの再燃を思わせる後者（大14・昭2）は、所謂「思想問題」に牽引されている点で前者とは異質なものである。しかし、この思想問題以前の弁論部員のなかに麻生久（大2）・赤松克麿（大4）・水谷長三郎（大7）・大宅壮一（大11）といった名前を発見するとき、2つの「山」は簡単には切り離せなくなる。

またブーム以前の侮蔑迫害時代とブーム以後の絢爛たる黄金時代は現象的には対照をなしているが、しかし「動もすれば浅膚と軽薄とに陥り易い弁論部の理想主義」（安倍能成）に対する戒めが一般に繰り返されたところを見ると、内容空疎で技巧的な演説屋＝演説使いは一貫して跋扈し続けたようだ。全盛期以降も流通した「弁論部的」なる形容詞の用法も微妙であり、ことは雄弁青年の本質規定にも関わる問題かもしれない。

### 2. 講談社社史と学生社会運動史：1910-1920

雄弁青年の系譜を辿っていくと、戦前期の大衆娯楽文化の代名詞＝講談社と岩波教養文化の最左翼＝学生社会運動とが、意外な接点をもっていることに気づく。あるいは「講談社文化と岩波文化の対立」（『昭和史』初版1955）の前史時代において、両者未分化状態のユースカルチュアを代表する地位にあったのが雄弁青年であったと言ってもよい。その両義性を最もよく象徴するのが、雑誌『雄弁』であり学生運動初期の闘士たちであった。

第2次弁論ブームは明治40年代に頂点に達する。すでに明治30年代を通じて主な高等学校・高専・私学には設立されていた学校公認の弁論部が、ついに東京帝国大学法科大学でも実現（1909）。率先してそれに助力した当時の法科大学書記・野間清治が大日本雄弁会を設立し（同年）、さらに発会式の演説速記をもとに雑誌『雄弁』を創刊させるに至った（1910）。これが大正期を通じて雑誌王国と呼ばれるまでに成長する講談社の前身であることは周知の事実だ。

「その頃は中学から大学までの弁論部の人間相手の雑誌のようだった」とは大正初年の中学時代に弁論部員だった林達夫の回顧。実際、明治末期から大正前期まで（ほぼ

1910年代)の『雄弁』は、弁論ブームと帝大法科を結合させた延長線上において硬派的・高級的な雑誌を指向していた。自ずと『中央公論』『改造』のように総合雑誌化の一途を辿るが、森戸事件(1920)をきっかけに野間編集部に介入、結局もとの弁論雑誌に戻るようになった。だが単純にもとに戻ったわけではない。これ以降『雄弁』の想定する読者層は、都会の知識青年よりも地方の教員・勤労青年にシフトしていく。

雄弁青年たちが同時代最先端の革新的気分を代表していたことは、学生社会運動史研究の知見からも確認できる(菊川1931, スミス1978訳)。たとえば組織性と持続性において「日本学生運動の源流」とされる新人会は東京帝大緑会弁論部のメンバーが中核となって結成(1918)されたものであるが、大正中期にはじまる学生運動は(少なくとも初期の段階では)大学や高等学校の弁論部を母胎としていた。何も旧制高校―帝大の官学系だけのことではない。伊藤隆「大正期「革新」派の成立」(1978)をはじめとする政治史研究の蓄積(季武1998, 有馬1999)を主要私学の弁論部部史・名簿などの資料でフォローしていくと、私学系雄弁青年の重要性が分かってくる。

東京帝大新人会にはじまる学生運動が、イデオロギー的には百花繚乱で理想主義的熱意の一点で結集していた前期段階から、マルクス主義を主流とする後期段階に移行するのは、全国学生連合会＝学運結成(1922)以降のことである。その量的拡大／質的転換とともに、母胎でありインフラであった弁論部はフラクション活動の場として併呑され、いつの間にか「弁論部」学生運動から「学生運動」弁論部へと包摂関係が逆転していた。

### 3. 昭和初期の転回と雄弁青年の交替：1920-1930

弁論部は、新設の高等学校(地名校)を含むかなりの部分の高等教育機関に設立された(文部省教学局『学内団体一覧』1940)。1節で触れておいた、大正末期からのブーム再燃の「山」の背景には、こうして各校に定着した弁論部活動の全国展開もあった。ところがその後、事態は急転回を迎えることになる。

高等学校長会議の申合わせ(1924)に従い高校社研の大部分が解散に追い込まれ、さらに文相通達(『生徒の左傾思想取締に関する件』1926)では弁論部活動を規制する項目が盛り込まれた。各校の弁論部が学校当局との局所的な攻防を繰り返しつつも後退を余儀なくされていき(帝国大学新聞記事)、三高の『弁論部部史』が「校内一般の無関心主義・学生弁論界の不振」を嘆いたのは昭和初期(1930年前後)のことだ。こうして雄弁青年たちの時代は学生運動もろとも弾圧され衰退のうちに幕を閉じた、かに見えるが――

雑誌『キング』を創刊(1925)した大日本雄弁会＝講談社は、大衆路線を国民的規模で展開するようになっていった。雑誌『雄弁』も、創刊20周年記念事業として「巡回実験雄弁法講座」を開設(1929)、2年間かけて全国の師範学校と青年団を巡回したほか、全国の青年団員を集めて

「全国青年雄弁選手権大会」を開催する(1934・41)など、いよいよ実践的な地方青年に傾斜していく。当時の読書調査(『全国青年団基本調査』1930)によれば、昭和初期の『雄弁』は青年団員の愛読雑誌であるだけでなく、(売上部数を考慮に入れると)読者層のかかなりの部分を青年団員に依存するまでになっていたことが分かる。

「当初は専ら帝都学生の雄弁であつたものが、次第に全国青年の雄弁たるに至り、社長の理想はほぼ実現されたのであつた」と中村孝也『野間清治伝』(1944)は総括しているが、要するに、帝都学生の撤退と地方青年の参入により弁論ブームの担い手が入れ替わったというに過ぎない。むしろ深刻なのは、雄弁青年のイメージが、あの講談社によって代表されてしまうことのほうである。

### 4. もうひとつの終わり方

『紅萌ゆる一昭和初年の青春』(1978)の筆者土屋祝郎は、第三高等学校入学(1929)以前は『浜口雄幸大雄弁集』を耽読する雄弁少年で、山形高等学校主催の第一回東北・北海道中等学校弁論大会で優勝した経験もある。三高入学後も、浜口雄幸・永井柳太郎・鶴見祐輔・大山郁夫といった当代の雄弁家たちが京都大阪に遊説に訪れるたびに出掛けて行くが、しかし寮の同室の先輩に「彼らの雄弁術なるものは大正時代の残滓にすぎないよ」とアッサリ片づけられた上、それでも懲りない土屋は「オンチ扱い」されて笑われる始末。三高生はもう浜口や永井を前世紀の遺物として投げすてて、さらにその先へ進んでいってしまっているというのか――と、土屋は語る。

姫路高等学校校友会による読書調査報告(1931)では、回答者152名のうち1名が愛読雑誌に挙げたに過ぎない『雄弁』が「保守的傾向、講談社流の修養主義、立身出世主義であるが一般に反動の名を以て知られる御用団体的傾向」と分類された(『旧制高等学校全書第七巻／生活・教養編2』)。帝国大学新聞(1929)には、『改造』のかわりに『雄弁』等の「低級なる郡小雑誌」を押し付けてくる図書室の思想善導的措施に憤慨する五高生の投書が寄せられた。昭和初期、すでに雑誌『雄弁』は高等学校生徒からは相手にされなくなっていたのである。正確には、積極的に嘲笑さるべき相手になっていた、と言うべきか。

明治40年代を頂点とする第2次弁論ブームは、結果として「双頭の怪物」を呼び出した。ひとつは野間清治の大日本雄弁会＝講談社であり、もうひとつは東京帝大新人会に代表される学生運動である。ともに弁論ブームの成果から最大限の可能性を引き出して巨大化したのである。この双頭の怪物は大正期を通じて勝手に成長し、結果として弁論ブームを飲み込んでいく。飲み込みの過程は時間差をとまって進行し、昭和初期までに完了した。

\* 文献等の詳細は当日配布のレジュメを参照のこと。